



ほ　う　せ　き　に　わ
なのはと宝石の庭

やまもとふみ／作

か　が　み　や
花芽宮るる／絵

contents

- 1 荒れ果てた庭あはれ ぐて た にわ
- 2 菜乃葉の失敗な の は しっ ばい
- 3 イチゴ泥棒いちご どろぼう
- 4 二冊のノートふた冊 の のーと
- 5 祖母の形見そぼ の かた み
- 6 過保護な真冬かほご ほんま まふゆ

プロローグ

63 53 41 33 26 8 6



もくじ



15	14	13	12	11	10	9	8	7
波乱の幕開け	宝石の庭	手作りの試験紙	勇気を振りしぼって	学校に行けば	埋まっていたのは	ふゆくんの薬箱	弱ったトマト	真冬のターン
.....								

181 172 144 128 121 112 94 85 71

Nanoha to houseki no niwa.

「宝石の庭」って…？

葉乃葉の亡くなったおばあちゃんの
家の裏庭。ブルーベリー、木イチゴ、
ブドウ、リンゴ……この庭に実ってい
るものは、ぜんぶ「食べられる宝石」
だと、おばあちゃんが昔言っていた。
ここで、真冬はおばあちゃんからたく
さんのことを教えてもらったみたい。

なのはと宝石の庭

登場人物

Nanoha to houseki no niwa.



あおい まふゆ
蒼井 真冬

ちょっぴりイジワルだけど、過保護。
葉乃葉のおばあちゃんと仲がよかった。



はむら なのは
羽村 菜乃葉

ワケあって不登校の中！女子。本が好き。
父親と二人でくらしている。



とう
お父さん

大学の先生。
葉乃葉のお母さんとは別居中。



たかはし
高橋くん

真冬の幼なじみ。



はやし せん せい
林先生

葉乃葉と真冬の中学校の
理科の先生。



なにより目^めを
引^ひいたのは――



ぼうせき
宝石
みたいな、

まばゆい
かがや
輝^もきを持^{ひとみ}つ瞳[。]。



ふわり、と風が吹いた。

キラキラと光の粒が舞い上がる。

風がざわめく音がして、草木がゆれ、わたしは目を細めた。

そこに、いた。

すつとのびた背丈。長い手足。光を浴び、金色にも見える淡い色の髪。

透き通るような肌。向こう側では、陽の光がゆらめいている。

そして、なにより目を引いたのは――。

宝石みたいな、まばゆい輝きを持つ瞳。

……人間じゃない。

そう思った瞬間、わたしの体がかたまった。

だって、まるで大好きなファンタジー小説に出てくる妖精が、そのまま現れたみた

いだったから。

心臓が、どくん、とはねる。

「え……妖精？」

気がついたら、声がこぼれていた。

すると、彼は目を見開いて、びつくりしたような顔をした。

まっげがゆつくりと瞬き、まるで時間が止まったみたいに静かになる。

わたしは思わず息をのんで……次の瞬間、彼はぶつと吹き出した。

とたん、

ぱんっ！

まわりの空気がまるでシャボン玉のようにはじける。

「妖精、つて。」

からかうような彼の笑い声が耳に届いて、わたしはあまりの恥ずかしさにまっ赤になった。

今思うと。

この出会いが、灰色だったわたしの世界にぽつりと落ちた、最初の色だったんだ。



1 荒れ果てた庭

縁側の外にはあざやかな青空が広がっていた。

五月晴れて言うんだよね、こういうの。

世間はゴールデンウィークが明けたばかりだ。

って、年中休日である、わたしにはまったく関係ない話だけど！

「……なあんて、ね。」

ため息を一つつくと、わたし、羽村菜乃葉十二歳、はゴロン、と広々とした座敷に転

がった。

座敷にはお仏壇が置いてあり、ちよつとお線香のにおいが残っている。

今どきお仏壇？ お線香？ って思った？

でもこの家が建てられたのは昭和三十年だから普通のこと。

わたしのおばあちゃんが生まれた年のことだつて聞いて、びっくりした。

わたしは訳あつて、お父さんとふたりで、去年亡くなつたおばあちゃん——お父さんのお母さんの家に住んでゐるんだ。

ひまだなあ……。

わたしは起き上がると、本棚に目を向ける。

かべ一面を埋めつくす本棚の一番上の段には、勉強の参考書や、お母さんが選んだためになりそうな本がならんでゐる。

けれど、それらはほとんど開かれることなくホコリをかぶつてゐる。

その下には、ここに引越してくるとき、どうしても置いてこれなかつたわたしの本がぎゅうぎゅうにつめられてゐる。

まず、こども向けの図鑑がズラリ。

動物、植物、昆虫、宇宙に恐竜。何度も読んだせいで、ところどころ破れていて、よれよれだ。

ほかは主に冒険小説やファンタジー小説だ。

一冊、お気に入りの海外のファンタジー小説を手にとる。

そしていつものように、本の中の世界に入りこもうとした。

だけど、

カチリ。

古い時計が八時半をさしたとたん、わたしが本の中に入るのをじやまするかのように、洗濯機がピーと、洗濯終了の合図を出した。

「あーめんどくさ……。」

と言いながらも、しぶしぶ本を置く。

お父さんは今日、お仕事で朝早くからいない。

だから、家のことはぜんぶわたしがやることになっていた。

カゴに入れた洗濯物を抱えて、縁側から庭に出る。

すぐそばにある物干しに洗濯物を干し終えると、目の前にあつた青々とした緑が目に入

る。

若葉わかばをたくわえた小ぶりなサクラの木には、ぶるんとした緑みどりの実みがなっている。

たしか、このサクラの実みって、食たべられるんじゃないかな。

サクラはサクラでも、サクランボの木きってこと。

昔むかし、おばあちゃんが言いってたような気がする。

『六月がつになったら遊びあそびにおいで。たくさん食たべられるからね。』

って。

お正月しょうがつやお盆ぼん休やすみにおばあちゃんの家いえに遊びあそびに来たのは、ずいぶんと昔むかしのことだ。

お母かあさんとおばあちゃんが仲なかが悪わるかったんだよね。

だから、用事ようじがないと来こなかつたし、来きたとしてもすぐに帰かえっちゃって。

それで、結局けつぎ、サクランボを食たべたことは一度いちどもなかつたんだ。

……食たべたかつたなあ。

って、もしかして、今年ことしは食たべられるのかな？

なんとなくワクワクしていると、ふと、サクラの根元ねもとに飛とび石いしがあるのが見みえた。

飛び石は、家の裏に続いている。

「え？　こんなの気づかなかった……。」

いつもは茂った草に隠れてしまつてゐるせいで、目に入らなかつた。

それに、門と家のあいだには、サクラやウメなどが植えられた、けっこうしっかりと広い庭がある。だから庭はここだけだつて思いこんでいた。

だけど、引越してきたときに家の塀のまわりをぐるりと回つたら、一周するのに二三分くらいかかったことを思い出す。

よく考えると、家に対してずいぶんと土地が広い気がする。

つてことは、裏も、うちの庭つてこと？

塀と家の狭い隙間を、地面に敷かれた飛び石に導かれるように歩いていくと、バラにおわれた緑色のアーチにたどりついた。

茂りに茂った葉っぱのせいで、アーチの向こうにあるものは見えない。

あれ？

「なんか、ここ、来たことがある、気がする。」

緑のアーチをくぐり抜けると、ざっと風が吹いてわたしはぎゅっと目を閉じる。

鳥が羽ばたく音がする。

水を含んだ濃厚な空気が体を包みこむ。

そつとまぶたを上げたわたしは、思わず目を見開いた。

だつて。

そこにはあざやかな色があふれていたから。

樹木には、色とりどりの大量の果実がなっていて、陽の光にキラキラと輝いている。



すぐそばの木には、小さな赤紫色の粒が、かたまりになっている。

見たとたん、甘酸っぱい味が口の中に広がってびっくりする。

「えっ、これ……木イチゴ？」

思わずふれる。

この木イチゴはたしかマルベリーとも言うんだって。

図鑑で見たからおぼえている。

さらに足元には赤い粒がたくさん。

野イチゴ——ワイルドストロベリーだ。

えっ、なに、ここ。

すごい。

塀の中ではあるみたいだし、うちの庭……だよね？

一歩、一歩、飛び石に誘われるように足を進める。

庭はものすごく広く、家が建っている場所の二倍くらいの面積がありそうだった。

だけど、進むにつれ、最初の感動が薄れてきた。

雑草ざっそうにおおいつくされた庭にわは、なにが植うえられているかわからない。
荒あれ果はてている、と言いつていいものだったから。

「ここつて、もつときれいじゃなかった？」

あと、もう少し広ひろかったような……つぶやいてハツとした。

ああ、わたし、おぼえているんだ。

この庭にわのあるべき姿すがたを。

だからがつかりしたんだ、つて自覚じかくしたとたん、急に頭あたまの中に記憶きおくが広ひろがった。

それは、昔むかし一度どだけ、お母かあさんの目めを盗ぬすんで、この庭にわに入りこんだときのものだった。

かつてのこの庭にわには、足の踏ふみ場ばがないくらいに、たくさん野菜やさいが植うえられていた。
八百屋やおやさんで売うられてるような野菜やさいが、ずらりとならんでいて、幼おないわたしは、

「これ知しってる！ トマトでしょ、キュウリでしょ！ それから、これは——。」

と大興奮だいこうふん。

おばあちゃんは、

「なのはは植物博士だねえ。」

とうれしそう。

どこから流れてくる甘い香りに目を細めたわたしは、次に視界に飛びこんできたあざやかな色にハツとした。

見上げると、頭の上の枝にたわわに実るのは色とりどりの果実だった。

熟している実もあれば、まだ青い実もある。

よく見ると、花が咲いている木も、葉っぱだけの木もあって、さまざまな果樹が入りまじっていた。

「これはブルーベリー。それから木イチゴ。ナシにブドウ。秋になったら、リンゴやカキ、ミカン、キウイフルーツ、もつとたくさんの実になるよ。」

おばあちゃんが指さしながら教えてくれる。

こんもりとしたブルーベリーは、つんでもつんでも採りきれないくらいになつていて。つみたてのブルーベリーの味は、甘かったり酸っぱかったりで、すごく濃い味がした。

「おばあちゃん。ここ、宝石箱、みたい。」

わたしはうつとりとつぶやいた。

そこはまさに、宝石の庭だった。

すると、おばあちゃんはうれしそうに笑った。

「だとしたら、ここに実っているものは、ぜんぶ、食べられる宝石だねえ。」

すっかり忘れていたことにおどろいた。

口の中には思い出の味が広がったけれど、今、ブルーベリーの木は一本だけになっていて、しかも花はまばら。なんとなく元気がなかった。

しょんぼりしつつ、見回す。

月桂樹やユーカリなど、昔と同じままそこにあるものもある。

けれど、ピカピカのトマトやキュウリなど、たくさんの野菜や果物が植えてあった広い畑には、草がぼうぼうと生い茂っていた。

「シロツメクサ、タンポポ、ヒメジヨオン……。」

どれもすごく強い植物で、一般的には雑草って言われる。

その隙間^{すきま}をぬうようにして茂^{しげ}っているハーブもあった。

「あ、すごい。ローズマリーにアップルミントだ。」

ローズマリーは香り^{かお}がよくて、お肉料理^{にくりょうり}とかに使う^{つか}けっこう有名なハーブだ。

そしてアップルミントはミントの一種^{いっしゆ}。すーつとしたい香り^{かお}がするんだ。

どちらも強い^{つよ}から枯^かれなかつたのかも？

見^みおぼえのある植物^{しよくぶつ}の名^なをつぶやきながら歩^{ある}いていると、どんどん記憶^{きおく}がよみがえってきた。

ああそうだ。

そうだった。

わたし、ここの庭^{にわ}を見^みたから、植物^{しよくぶつ}が好^すきになつたんだった。

あの日^ひ、あまりにきれいで、これはなに？　これはなに？　って、おばあちゃんにたず

ねていたんだ。

そんな知^しりたがりのわたしに、おばあちゃんは、うれしそうにいろんなことを教^{おし}えてくれた。

花の名前や、木の実の育ち方、葉っぱのにおいまで——ぜんぶ、楽しそうに。

だからわたしも、いつのまにか、いろんな植物のことをおぼえてしまったんだ。

そしてその後の誕生日におばあちゃんからもらった植物図鑑を、わたしはずっと宝物にして、くり返し読んでいる。

お母さんには、「そんなムダなことより、受験に役立つ勉強をしなさい！」つていやがられてたけど。

あれだけはどうしてもやめられなかったな。

意外な原点にたどりついて、びっくりしていると、飛び石が終わる場所だった。

ふと見ると、そこにも広い畑があった。

ん？　なんでここだけ雑草がないの？

黒々とした土が見えて、わたしはびっくりした。

どう見ても、たがやされている。

たがやされているどころか、そこには苗が植えてあったのだ。

「え、お父さんがやったのかな。」

一瞬いつしゆんそう思おもったけれど、すぐにちがうと思おもった。

だつてお父とうさんはお仕事しごとがいそがしくて、朝あさは早はやいし、夜よるも遅おそい。こんなことをする時じ間かん、ないはず。

「トマトの苗なえ？ あとキュウリとイチゴとシソとサツマイモ、それにカボチャも???」

植うえてあるものの名なを思おもわず口くちに出だすと、

「なんで、見みただけでなんの植しょくぶつ物ぶつかってわかる？」

ふと声こえがして、わたしは声こえのほうへふり返かえる。

奥おくの塀へいに設もうけられている裏口うらぐちから現あらわれた人影ひとかげを見みて、わたしはかたまたった。

すつとのびた背せ丈たけ。

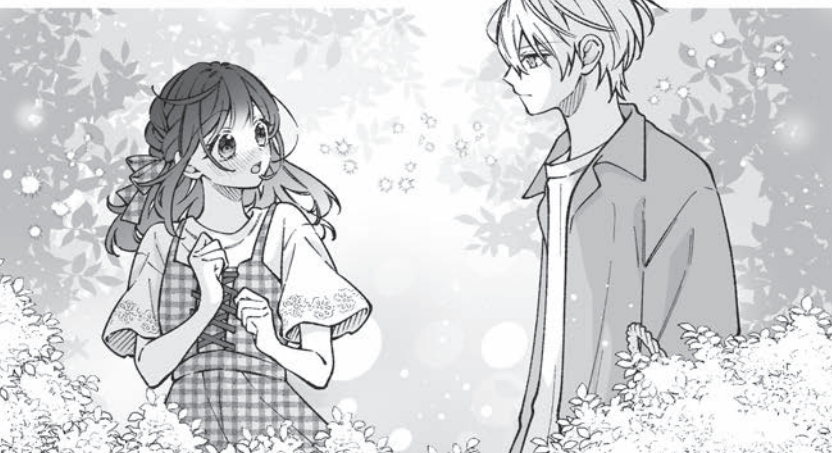
長ながい手足てあし。

色素しきその薄うすい、サラサラの髪かみと整ととのった顔立かおだち。

中なかでも目めを引ひくのは、宝石ほうせきみたいなまばゆい輝かがやきを持もった瞳ひとみ。

ふと頭あたまの中なかに、さつき手てに取とったファンタジー小説しやうせつが浮うかんだ。おぼえるくらいに何度なんど

も見た透とう明感めいかんのある水みずの妖精ようせいの挿絵さしえと、その子こが重かさなつて見みえた。



「え……妖精？」

わたしがつぶやくと、妖精は目を見開く。

かと思うと、ぶつと吹き出した。

「妖精、つて。」

とたんにまわりの空気が、ぱんつとまるでシャボン玉のようににはじけ、わたしは目を瞬かせた。

我に返ったわたしは気づいた。

そこにいたのは、どう見ても、人間の男の子だ。

しかも、わたしと同じくらいの歳の。

「……………」

ブワツと顔に血が集まるのがわかった。

わああああ、わたしのバカ!!!

いるわけないじゃん、現実に妖精なんて!!!

男の子はくつくつと笑いながら、肩をふるわせている。

かと思うと、彼は裏口のすぐそばの木になつていた黒い実をつみ取った。
さつきと同じマルベリーでも、こちらは熟したマルベリーだ。

え？

目を瞬かせたわたしの前で、彼はぱくん、と実を口に入れ、「まだ、ちょっと早いかな。」とつぶやいた。

は？？？

男の子は今度は野イチゴをつみ取ると、手に持っていたカゴに入れていく。
そ、そういえば。

ここが、うちの庭で、妖精でないならば。

この『人』はよく考えると立派な不法侵入者で。

つてことは。

現状をじわじわと理解したわたしは、今度は頭から血の気が引いていく気がした。
きつと顔はまっ青だ。

「ど、どろぼ——！」

思おもわずさけぼうとしたら、男おとこの子がギョツと目めをむき、わたしに飛とびついて口くちをふさいだ。

大おおきな手てがわたしの口くちをおおう。

ぎゃ、ぎゃああああ!?!?

「ちがう。つていうか、ここはおれの庭にわなんだけど。」

おれの？

そんなわけないじゃん！

と思おもったけど、口くちをふさがれているから言いえない。

つていうか、この子こすごい力ちからなんだけど——これつて、かなり、やばくない!? も、もしかして犯はん罪ざいに巻まきこまれかけてる!?

恐きよう怖ふで体からだがかたまると、男おとこの子こは、

「あ。ごめん！」

と、あわてたようにわたしを離はなした。

わたしがあらためて悲ひ鳴めいを上げようとすると。

彼は口元に指を立てて「しー！」と制する。

いや、しー！　じゃないし！

と思つて口を開けると、男の子はわたしの口に野イチゴを放りこんだ。
ぶわっと広がる甘酸っぱい果汁に、わたしは思わず目を見開く。

甘い！　おいしい！

——　じゃなくって！

男の子はそんなわたしの目をじつと見つめる。

あまりにきれいな目。

見惚れたわたしは、言葉を失う。

そんなわたしに、彼は、ゆつくりとたずねた。

「あんたさ、中学生だろ。——　どうしてこんな、平日の昼間にここにいる？」



菜乃葉の失敗

問われたわたしはかたまつた。

わたし、羽村菜乃葉が、学校にも行かずにどうしてこんな時間（じかん）にこんなところにいるのか。

それには深い——深い事情（じじょう）があるのだ。



「なのはちゃん、中学（ちゅうがく）、別々（べつべつ）になっちゃうんでしょ？」

「なのはちゃんって、頭（あたま）いいからな。」

クラスの子にそう言われるたびに、誇らしかった。

わたし、小学校のころは、自分で言うのもなんだけど、けっこうまじめな子だったと思う。

趣味は読書。

先生の言うことも、お母さんの言うこともよく聞いてた。

勉強は好きだったし、テストでいい点を取ると、お母さんがすぐよくこんでくれた。

ほめられるのがうれしくてがんばってたら、いつのまにか中学受験をすることになっていた。

お母さんはよく言ってた。

「あなたには特別な力があるんだから、ちゃんとそれをのばさないと」って。

いい大学に行って、大人になったら、お母さんみたいにバリバリに働く。

それが「わたしの未来」だって、なんのうたがいもなく信じてた。

受験勉強は本当に大変だったし、まわりの子が遊んでいるときに、ひとりで勉強してる

のはやっぱりつらかった。

でも、自分に合った学校に行くためだっと思って思ったら、ぜんぜんがまんできたんだ。

だけど。

「うそでしょ……。」

いちばん行きたかった学校の合格発表で、自分の番号がなくて。

「自分はダメなんだ」って思ったら、実力がだせなくなつて。とうとう受けた私立中学にぜんぶ落ちてしまったんだ。

思い描いていた未来が、ガラガラとくずれていくような気がした。

だけど、人生はきびしい。

受験といっしょに終わってくれることなく、日々はなにごともしなかつたように続いていく。

学校には行かねばならない。義務教育つてやつだ。

だけど、地元の公立中学には小学校のメンバーがそのまま持ち上がる。

あの子たちといっしょに学校に通うの、ぜったいムリだっと思って。

だつて、あの子たち、きつとこう言うに決まつてる。

『遊あそばずに勉強べんきょうばかりしてたガリ勉べんなのに、ぜんぶ落おちるとかウケる〜!』

『ぜんぜん大したことなかったってことでしょ？　なのに、えらそうにしてたし、ざまあみろだよね。』

そんな声こえが今いまにも聞きこえてきそう。

いつしよに通かようのなんて、ぜったいできないって思おもったんだ。

「学校がっこうに行いかないって、どういふこと!？」

お母かあさんはお母かあさんで、わたしが特別とくべつでもなんでもなかったことに、わたしよりもシヨックを受うけていた。

悲かなしかったし、申し訳わけなかったけど——でも、それでもムリだった。

「あの学校がっこうだけは、ぜったいに行いきたくない……行いけないよ。」

それにもう、勉強べんきょうだつてしたくなかった。

だつてぜんぶ、なにかもムダだつたってことだし。

わたし、お母かあさんの期待きたいに応こたえられないこともだつたってことだし。

「じゃあ、これからどうするつもりなの！　高校受こうこうじゅけん験けんも、大学受だいがくじゅけん験けんもあるのに、こゝでつ

まづいてどうするの！ 落ちこぼれて、生きていけなくなるわよ！」

中学校に通えないって言い張るわたしと、なにがなんでも行きなさいって命令するお母さんのけんか。

そのとき、見かねたお父さんが、ぽつりと、ある提案をしてくれたんだ。

お父さんの生まれたこの家は、おばあちゃんがいなくなつたあと、ずっと空き家になつていた。

人が住まない、家つてどんどん傷んでしまふんだ。

それに、大事な思い出がつまつた家だから、お父さん、どうしようかって悩んでたみたい。

いい機会だから、引越して、別の学区の中学に行くのはどうかって。

それなら、知ってる人はいないだろうし、バカにする子もきつとない。

それ、いいかもって思つた。

でも、お母さんは大反対だつた。

だって、おばあちゃんの家はわたしの家からけつこう遠い。

通勤が大変になるってお母さんは言った。

お父さんはすぐに新しい仕事を見つけてくれた。

でもお母さんは転職はできないからって、ひとりで家に残ることになった。

大好きなお母さんといっしょにくらせなくなるのはいやだった。

でも、これ以上落ちこぼれて、お母さんにガツカリされるのもいやだった。

だから。

わたしは、知らない子ばかりなら、新しくスタートを切ることができるかもと思っ

て、お父さんの提案にのることにしたんだ。

だけど、現実はそんなに甘くなかった。

入学式の日。

わたしは同じ塾だった子を見かけてしまった。

「どうして」って、体がかたまった。

だつてありえない。

知ってる人がいないところまで、やってきたはずだったのに。

「あれえ、羽村さんじゃん？　なんでここにいるの？」

その子に声をかけられたとたん、わたしは思わずその場から逃げ出した。

受験に失敗してここに逃げてきたのがバレるのが、こわくて、こわくて、たまらなくなつて。息がうまくできなくなつて気分が悪くなつて、保健室に行くと、そのまま早退した。

それつきり。

五月になつてもわたし、学校には行けていない。

だれにも会わないようにつて祈りながら、ずっと、この家に閉じこもっているんだ。





イチゴ泥棒

と、そこまで思い出したわたしだったけれど。

口にするのはためらった。

要は、中学受験に失敗して、それをバカにされるのをこわがって、学校から逃げ出した。

まとめてしまえば、それだけのこと。

あらためて言葉にしてみると、どこが深いかわからない、なんだかありふれた話だった。

わかってる。

でも、どうしても行けない。

学校がっこうに行いこうとすると、恐怖きょうふで体からだが動うごかなくなる。

自分じぶんでもどうしようもなかった。

「——って、別にべつにどうでもいいよね？ わたしは、羽村菜乃葉はむらなの。こここのの住人じゅうにんだよ。だから

こここのの庭にわはわたしのものだよ。」

苦にがい思おもい出でを心こころのすみすみに押おしやつて言いうと、男おとこの子こはふうん、とうなつた。

「やっぱりあんたが……か。おれは、蒼井真冬あおいまふゆ。」

やっぱりつてどういいう意味いみ？

それから、蒼井真冬あおいまふゆ……真冬まふゆ？

わたしは、ん？ と首くびをかしげた。

どこかどこでその名前なまえ、聞きいたようような……？

あ。

「え、あなた、もしかして、豊穰中学ほうじょうちゅうがくの一年ねん……だつたりする？」

入学式にゅうがくしきで、一日いちにちだけ登校とうこうしたときに聞きいたんだ。

出欠しゅつけつをとったとき、ひとりだけお休みやすみの子こがいた。

その子が、たしか蒼井真冬。

せっかくの入学式なのに来れなくてかわいそうって思つたのを、おぼえてる。
蒼井くんは、うなずいた。

「それどころか、同じクラスだな。」

「どうやら、予想は当たつたらしい。」

「つてことは、あなたも学校行つてないつてことじゃん。」

言われっぱなしはいやだったから、そう言い返すと、蒼井くんはニツと笑つた。

「おれは今日、体調不良だから。朝、熱があつたんだ。」

えええ？

「おもう、思わずじつと観察してしまふ。」

「ただ、どう見てもそんなふうに見えない。元気でしょ。」

「熱があるのに、なんでここに居るの？ 単にサボってるんじゃないの？」

「今は下がったからだ。このご時世、熱があつたら登校ひかえるのが当然だろ。おれは

正当な理由。サボってるのはあんただろ。」

痛いところをつかれてグツとつまる。

うう、なんか、口が達者な子だ。

「――ま、どうでもいいけど。」

わたしが黙ると、蒼井くんは再び野イチゴをつみ始める。

カゴの中には野イチゴの山ができて始めていた。

だ、か、ら！

「その野イチゴ、うちのだよね？？？　ここ、うちの敷地なんだけど。」

「いや、おれの。イチゴをつむのはおれの仕事なの。」

蒼井くんはゆずらない。

どうして！

ムツとしてにらむと、蒼井くんはにらみ返してきた。

「つてかさ、いまさらなんなの。あんたが引越してきてからも、おれ毎日ここに來てたんだけど。」

え、そうなの？

「その苗なえだって、おれが植うえた。」

な、なるほど！ 犯人はんじんは蒼井あおいくん？

びっくりしていると、蒼井あおいくんはカゴの中なかを漁あさって、二冊さつのノートを差し出だした。
どちらも古ふるくて分厚ぶんあつい。

一冊目さつめのノートの表紙ひょうしには『料理りょうり』と書かいてある。

「これ、あんたのばあちゃんばあちゃんの遺言ゆいごん。」
遺言ゆいごん？

って、亡なくなった人ひとが残のこされた人ひとに伝つたえる、さいごの言葉ことばのこと。
つまり、おばあちゃんおばあちゃんが残のこした言葉ことばだ。

ドキドキしながらページをめくると、そこにはこう書かいてあつた。

『この庭にわでできる作物さくもつは、蒼井真冬あおいまふゆが自由じゆうにしてよい。』
えええ？？？ なにこれ。

「で、でもこれ、おばあちゃんおばあちゃんが書かいたかどうかなんてわかんない……。」「
と、言いいかけたわたしは、途中とちゆうで口くちを閉とじた。



だつて、おほらかなのびのびしたこの字。

図鑑ずかんを送おくつてくれたときに入はいつていた手紙てがみと同じ字おなじだつた。

おばあちゃんの字じにまちがいない。

「でも、どうしてこれをあなたが持もつてるの。」

蒼井あおいくんは少すこしめんどうくさそうに言いつた。

「ばあちゃん、まちがつて捨てすてられたらいやだからつて。あずかつた。これはあんたに。」

手渡てわたされたのはもう一冊さつのノート。

こちらの表紙ひょうしには『庭造にわづくり』と書かいてある。

大おおきく息いきを吸すつてノートを開ひらく。

最初さいしよのページに書かいてある一文いちぶんを見て、わたしは思おもわず息いきをのんだ。
だつて。

『庭にわとこのノートは、羽村菜乃葉はむらなのはに残のこします。庭にわに残のこした、おばあちゃんの宝物たからものを見みつけてください。』

蒼井^{あおい}くんのノートと対^つになるように書^かかれていたのは、どうやらおばあちゃんからわたしへの遺言^{ゆいごん}のようだった。

「宝物^{たからもの}……ってなに？」

そうつぶやきつつも、わき上^あがったのはとまどいだった。

どうして、わたしに？

だってわたし、おばあちゃんにはしばらく会^あってなかったのに。

ほとんど会^あいに来^こなかつたし、孫^{まご}らしいこと、なにもしてなかったのに。

それなのに、庭^{にわ}を残^{のこ}すって、宝物^{たからもの}を見^みつけろって、一^{いっ}体^{たい}どういうこと？



二冊ふたつのノート

なんだかふしぎに思いながらもパラパラとノートをめくる。

それはどうやら、庭にわの管理かんりノートだった。

日付ひづけと、その日ひになにをしたのかが書いてある。

日付ひづけは一月がつから始はじまっていた。

一月七日がつなのか 雪ゆきが降ふる。雪ゆきかきをする。七草ななくさをつんで粥かゆにする。

へえ、七草ななくさが採とれるんだ。

七草ななくさってあれだね。

セリ、ナズナ、ほかには……たしか、ゴギョウ、ハコベ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ、だったかな。

スズナはカブで、スズシロは大根のことだったような……。それを入れたお粥を一月七日に食べるって、聞いたことがある。

と思い出しながらどんどんめくっていくと、五月のページになった。

五月一日 雑草とり、水やり。高橋さんが苗を持ってきてくれたから、植えつけ。

五月二日 肥料作り。生ゴミをまとめてコンポストに入れる。

五月三日 ラベンダーの剪定、水やり。

五月四日 スズランが咲く。つんで花瓶に飾る。

五月六日 バラのつぼみがふくらむ。日あたりをよくするために枝を整理。

メモ書き程度だけれど、ほぼ毎日つづいている。

最後のページまでざっと見ると、ふと目にとまる文があった。

『ふゆくんはやさしすぎて生き物を育てるのが苦手だから、庭は菜乃葉にまかせます。』
はあ……？

「これなに？」

わたしは蒼井くんに問いかけた。

ふゆくんというのは、おそらく彼のことだろう。

その親しげな呼び方がなんだか気にさわった。

だって、おばあちゃんの孫はわたしなのに。

あと、やさしすぎるっていうほめ言葉。なんだかずるい。

すると蒼井くんは、ちよつと苦笑いをしてため息をついた。

「おれがやると、命を吸い取るから。」

うつむいた蒼井くんの顔はどこか陰がさしていた。それがきれいな顔立ちに、ふしぎな
迫力をそえていた。

なんだか、人じやない、みたい。

ふと、そんな考えがよぎる。



まさか、^{おも}と思いながらも、つい口^{くち}がすべった。

「命^{いのち}をつて……吸血鬼^{きゅうけつぎ}じやあるまいし。」

すると蒼井^{あおい}くんはあきれたように笑^{わら}った。

「吸血鬼^{きゅうけつぎ}が吸^すうのは、命^{いのち}じやなくて血^ちだけど……つて、あんた、さ。さつきの妖精^{ようせい}とい
い、ファンタジーとか好^すきな人^{ひと}？」

——ハッ!!

あああ、またやつちやつた!

恥ずかしいい！

グツと言葉につまっていると、蒼井くんははじけるように笑う。

その顔からは陰が消えていて、あれは見まちがいだったかな？　と思う。

「つまりさ、おれが世話すると枯れるんだよ。」

「え、この庭がこんなふうになったのって、蒼井くんのせい？」

今の言い方だと、彼が庭の手入れをしてたってことになる。

それでこのありさま。それはひどい。

びつくりしていると、彼はちよつとバツが悪そうな顔になった。

「……まあな。だからなんとかしろ。こっちは命がかかってるんだ。」

「命？」

おおげさすぎない？

と思つたけれど、蒼井くんは真剣な顔をしていた。

「それに……なんとかしろって言われても。」

本気かどうかかわからないけど、なんとなく冗談で流していい感じじゃなかった。

え、なに、事情あり？

ちよつと心配になつてゐると、彼はニヤリと笑う。

「あんた、だいぶ詳しそうじゃん。助っ人登場で助かった。」

え、助っ人！？

つて、この庭の世話、押しつけられそうになつてゐる！？

この荒れ放題の庭を！？

うっわ、どう考えても重労働！

ムリムリ、面倒ごとはいやです！

「そ、そんなことないよ？ 助っ人とか、ムリだし。」

でもさつき「この庭はわたしのもの」つて言つちやつたし。

うう、断れない気がする。

気まぐれて目をそらすと、蒼井くんが、わたしの顔をのぞきこむようにして言つた。

「いや、さつきだつて、苗を見ただけで、なんの植物かわかつてた感じだったじゃん。

通、わかんないだろ。」

普

「好きなものは、なんとなくおぼえちゃうだけだよ。」

そう言いながら苗を見おろしたわたしは、ハツとした。
苗がぐったりしている。

え、なんだかすでに弱って、ない？

思わずしやがみこんでふれる。

トマトの苗は茎がそばに立てた支柱にもたれるようだし、キュウリもなんとなく葉っぱにハリがない。

カボチャも葉っぱが黄色くなっているし、サツマイモは葉っぱがしなびている。
イチゴの葉はなにかに食べられたあとがある。

でもそれだけじゃない。

よく見ると、茎の根元がなんだか黒っぽくて、ぐらぐらしている。
唯一元氣そうなのはシソだけ。

「これ、いつ植えた？」

わたしは蒼井くんを見上げた。

「五月一日。一週間前しゅうかんまえかな。その『庭造りにわづく』ノートに書かいてあるとおりにやつてる。」

「一週間前？」

だとすると、普通ふつうなら、もう根ねづいてて、こんなに弱よわってるはず、ない気きがする……。

さっきの言葉ことばが耳みみによみがえる。

——おれが世話せわすると枯かれるんだよ。

え、あれって、ほんと？

ってことは、命いのちを吸すい取るつてのも……ほんと？

そんなわけないと思おもいつつ、かすかなうたがいがわき上あがったとき。

蒼井あおいくんはちよつと眉根まゆねをよせてわたしを見みた。

「さっきの、信しんじる気きになった？」

そう言いって笑わらった顔かおは、どこか悲かなしそうだった。

わたしは気きになりつつも、すぐに否定ひていする。

一瞬いつしゅんでも信しんじかけた自分じぶんがバカみたいだった。

「そんなわけないじゃん。こうなったのは、ぜったいほかに原因げんいんがある。」

確信かくしんを持つて言ういと、蒼井あおいくんはぽかんとした顔かおになった。

「ほかに原因げんいん？ おれ以外いがいに？」

わたしはうなづく。

「当たり前まえだよ。命いのちを吸すい取とるとか、そんな非科学ひかがくてきなことじゃなくって、もつと科学かがくてき的な原因げんいんに決きまつてる。」

「科学かがく……。」

蒼井あおいくんはじつとわたしを見みつめてくる。

その瞳ひとみは少し青あおみがかつていて、なんだか海うみの底そこを思おもわせる。

吸すいこまれそうな気分きぶんになったわたしは、ハッとして目めをそらす。

うわ。

そーいう目めで見みるの、やめて！

人ひととの距離きょりの取とり方かた、もともとよくわからないのに、男おとこの子ことか、ぜんぜんムリ!!

蒼井あおいくんはニヤツと笑わらった。

「非科学ひかがくてき的てきって……妖精ようせいとか吸血鬼きゆうけつぎとか言いってたくせに？」



「それはもう忘れて！」

ドッカン、と頭が噴火しそうになる。

黒歴史！

あれは、受験のためにたくさん本を読んだだけです！！

たまたま読んだのがファンタジーだっただけで！！

とはいっても、お母さんは、ファンタジーは、受験にはあんまり関係ないでしょってい

い顔しなかったけど……。

とにかく！

フィクションとノンフィクションのちがいくらい、ちゃんとわかりますから……！！

そもそも蒼井くんが人間ばなれした美少年だから、話がややこしくなってるだけで

……！！

って言いたいけど言えるわけないじゃん！

本人に面と向かって美少年とか言えないよ！

そのくらいのことは、わかってる！

と思おもいながらも、わたしは言いった。

「だ、だから！ 命いのちを吸すい取とるとかそういううさんくさい理り由ゆうじゃないって、わたしが証しょう明めいしてみせるから。」

頭あたまのどこかでは、ぜったい面倒めんどうごとに巻まきこまれるから、関かかわつちやダメおもって思うんだ
けど……。

苗なえが枯かれちゃうのはなんだかいやだし、そもそも枯かれるのはどうしてなんだろうってふ
しぎだし。

それに。

蒼井あおいくんが一瞬いつしゆん見みせた、なにかをこらえているような表ひょうじよう情ぎが気きになつてしょうがなかつ
たんだ。